

南米[アルゼンチン]



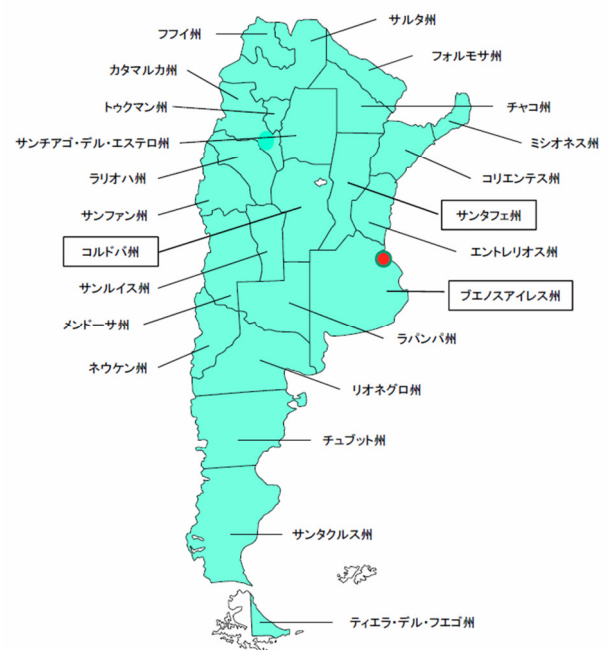
1 農・畜産業の概況

アルゼンチン政府の最新農牧センサス（2010 年）によると、農業経営体 28 万戸の所有面積は 1 億 5500 万ヘクタールで、このうち 4650 万ヘクタールが農地として、1 億 850 万ヘクタールが牧草地として利用されている。ブエノスアイレス州、コルドバ州、サンタフェ州を中心とするパンパ地域は、平たんかつ肥沃な土地条件に加え、気候も穏やかで降雨にも恵まれており、農畜産物の主産地となっている（図 1）。

アルゼンチンの農畜産業は、国内産業に占める比率は国内総生産（GDP）の 6%程度であるが、農産物輸出額は全輸出額の約 6 割を占め、農畜産業は外貨獲得上、極めて重要な地位にある。なお、クリスティーナ・キルチネル政権（2007 年 12 月 10 日～2015 年 12 月 10 日）では、国内優先主義に基づいた輸出規制政策を実施したため、競争力のある一部農業以外の産業は衰退傾向が続いた。

2014 年の農畜産物輸出額は、113 億 9300 万米ドルと、最大品目である大豆油かすをはじめ、堅調な国際相場を受けて前年を 10.4%上回った。

図 1 アルゼンチンの行政区分



資料：機構作成

注：赤印は、ブエノスアイレス特別区。

2 畜産の動向

（1）酪農・乳業

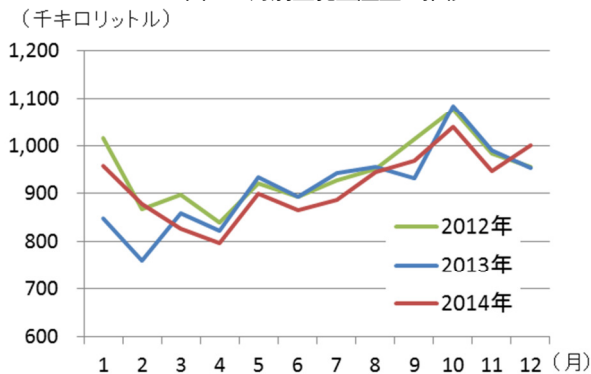
アルゼンチンの酪農は、放牧主体でありパンパ地域に集中している。主な生乳生産州は、サンタフェ州（2014 年の生産量シェア 34.3%）、次いでコルドバ州（同 32.9%）、ブエノスアイレス州（同 25.0%）である。乳牛の主要品種はホルスタイン種で、全飼養頭数の 9 割以上を占めるとされる。

① 生乳の生産動向

アルゼンチン農牧漁業省(MINAGRI)によると、2014 年の生乳生産量は、1101 万キロリットル（前年比 0.4 %増）と前年から微増した。

月別の生乳生産動向は、10 月に最も生産量が多くなり、夏場の 2～4 月にかけて落ち込む傾向にある（図 2）。近年は、放牧に加えてトウモロコシなどの飼料穀物を補助的に給与する飼養管理も増加している。

図2 月別生乳生産量の推移



資料：MINAGRI

② 牛乳・乳製品の需給動向

2014年の牛乳・乳製品の消費量は、前年比0.8%減の823万9000キロリットルとなった(表1)。

表1 牛乳・乳製品の需給

(単位: 千キロリットル)

区分	2010	2011	2012	2013	2014
生乳生産量	10,308	11,206	11,339	10,971	11,010
輸出量	1,897	2,711	2,493	2,890	2,510
輸入量	30	11	6	27	21
消費量	8,304	8,393	8,918	8,304	8,239

資料：MINAGRI

注：数値は生乳換算。

アルゼンチンは、全粉乳の輸出量で世界第3位に位置するなど主要乳製品輸出国の1つであり、ホエイやチーズの輸出も盛んである。アルゼンチン国家統計局(INDEC)によると、2014年の乳製品の輸出量は、37万233トン(前年比14.0%減、製品重量ベース)、輸出額は16億4994万米ドル(同7.5%減)となった(表2)。要因として、最大輸出品目である全粉乳がEU産に押されて大幅に減少したことや、輸出登録制度(ROE BLANCO)による実質的な輸出規制が強まったことが挙げられる。

表2 乳製品輸出量の推移

(単位: 千トン)

区分	2010	2011	2012	2013	2014
全粉乳	128	202	205	189	142
ホエイ	45	70	65	79	68
チーズ	45	64	61	57	61
脱脂粉乳	20	19	14	25	21
その他	79	96	85	80	78
合計	317	450	429	431	370

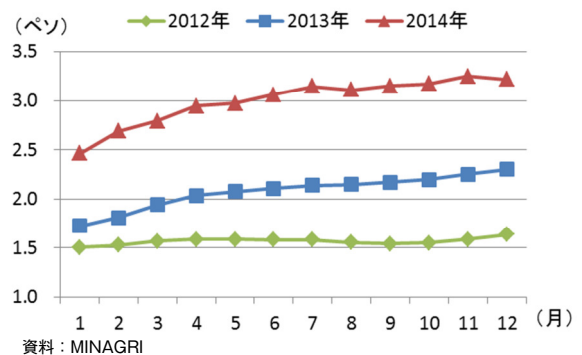
資料：INDEC

2014年の主要輸出先の中では、従来のベネズエラ、アルジェリア、ブラジルの他、ロシア向けが大幅に伸びた。これは、ロシアが2014年8月からウクライナ問題で同国に経済制裁をとる欧米諸国に対して農畜産物の禁輸措置を講じた結果、調達先をEUから南米へ切り替えたことによる。

③ 牛乳・乳製品の価格動向

2014年の生産者乳価(乳業メーカーによる生乳1リットル当たりの生産者支払い価格)は、国内消費が堅調に推移したに加え、インフレによる物価上昇を反映して、1リットル当たり2.99ペソ(前年比44.5%高)となった(図3)。

図3 生産者乳価の推移



資料：MINAGRI

生産者乳価は、自由経済が導入された1991年以降、乳業メーカーが独自の基準で決定してきたが、2011年に成分の品質特性や衛生基準に基づいて支払う制度が創設された。これは、乳業メーカーが酪農家に支払う価格を安定させることを目的としており、政府が毎月決定する基本乳価に、乳業メーカーが生産量、保存温度、たんぱく質、細菌数などを考慮して増減させるものである。従来、乳価の20%がメーカーの独自設定部分とされていたが、2013年8月に制度が改正され、独自設定部分は5%となり、生産者間で乳価の平準化が図られる形となった。

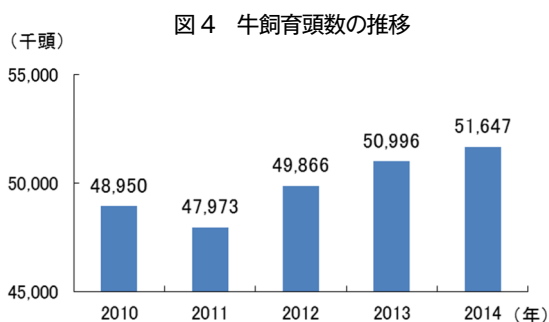
(2) 肉牛・牛肉産業

アルゼンチンの肉牛生産は、肥沃なパンパ地域を中心に、アンガス、ヘレフォードなどヨーロッパ品種およびその交雑種による放牧肥育が一般的である。

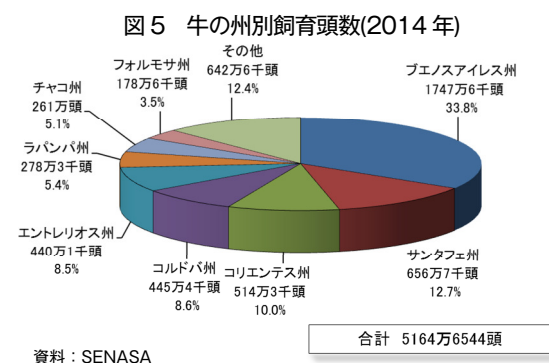
南パタゴニア地域と呼ばれるチュブット州、サンタクルス州、ティエラ・デル・フエゴ州に加え、2007年5月には北パタゴニアB地域と呼ばれるリオネグロ州とネウケン州が国際獣疫事務局（OIE）から新たに口蹄疫ワクチン不接種清浄地域のステータスを獲得した。また、同国のBSEについては、「無視できるリスク」と評価されている。

① 牛の飼養動向

牛飼養頭数（乳用種を含む）は2008年以降、干ばつや肉牛経営の収益悪化などから繁殖雌牛のと畜が進んだため、前年を下回って推移していたが、2012年以降、国内外の需要回復を受けた価格の上昇により増頭意欲が増したことで、2014年には5164万6544頭（前年比1.3%増）となった（図4）。州別では、ブエノスアイレス州（34%）、サンタフェ州（13%）、コリエンテス州（10%）の3州で全体の6割強を占めている（図5）。



資料：国家動植物衛生機構（SENASA）



資料：SENASA

② 牛肉の需給動向

ア 生産

2014年のと畜頭数は、1210万979頭（前年比4.2%減）、牛肉生産量（枝肉重量ベース）は267万4095トン（同5.2%減）となった（表3）。最大の肉牛・牛肉生産州であるブエノスアイレス州で、雨期となる2月に平年以上の降雨を記録し、その後の天候も不安定となったため、路面の悪化などにより牛の集荷や輸送が困難となり、と畜頭数が減少したとみられている。

表3 牛乳需給の推移

区分	2010	2011	2012	2013	2014
牛と畜頭数(千頭)	11,863	11,883	11,429	12,625	12,101
生産量(千トン)	2,626	2,497	2,596	2,822	2,674
輸出量(千トン)	314	234	188	201	212
1人当たり消費量(kg)	57.0	54.9	59.0	63.1	58.6
去勢牛生体価格(ペソ/kg)	6.5	8.1	8.9	9.6	15.1

資料：MINAGRI

注：生産量、輸出量、1人当たり消費量は、枝肉重量ベース。

イ 輸出

2014年の牛肉輸出量（枝肉重量ベース）は、21万1629トン（前年比5.1%増）となった。一方、同年の輸出金額は、主要牛肉輸出国の生産が回復して平均輸出価格が下がったことで10億4106万米ドル（同3.1%増）にとどまった。

なお、輸出管理政策のうち、牛肉輸出の最大の障害とされる輸出課徴金（輸出税）制度は、1994年に油糧種子に対して設けられたのが最初であり、2001年の同国でのデフォルトの際、著しい外貨準備高不足に陥った政府が、主力輸出農畜産品であるトウモロコシや大豆、牛肉などを対象に加えたものである。なお、2014年の牛肉の輸出税率は15%であった。

また、EU向けのヒルトン枠（一定基準を満たす骨なし高級牛肉に対するEUの関税割当制度、対象年度は7月1日～翌年6月30日）は、ドイツ向けが全体の6割強を占めた。なお、アルゼンチンのヒルトン枠の年間配分数量は、2004/05年度以降2万8000トンであったが、EU加盟国が増えるにつれ、2011/12年度は2万9375トンに、さらに2012/13年度には3万トンに引き上げられた。

2014/15 年度は据え置きとなったが、消化率は、76.22%（2 万 2867 トン）と、8 年連続で割当数量を満たさなかった。

ウ 消費

2014 年の 1 人当たり年間牛肉消費量は、58.61 キログラム（前年比 7.1%減：枝肉重量換算）となった。要因としては、景気低迷および深刻なインフレで高価な牛肉の消費が落ち込んだことによる。

③ 価格動向

主要な家畜市場であるリニエルス家畜市場（ブエノスアイレス市）の 2014 年の肥育牛（去勢牛）価格は、年率 30%以上とされるインフレの影響などにより、生体 1 キログラム当たり 15.1 ペソ（前年比 57.1%高）となった。

3 飼料穀物の動向

アルゼンチンのトウモロコシ生産量は、世界の生産量の約 3%を占める。牛肉生産が放牧中心であることから、トウモロコシの国内需要は生産量の 3 割強と少ない。このため、2014/15 年度（3 月～翌 2 月）のトウモロコシ輸出量は世界貿易量の 14.4%を占め、輸出実績では米国、ブラジル、ウクライナに次ぐ世界第 4 位となっている。しかし、トウモロコシ生産の収益は大豆に比べ低いことに加え、輸出許可数量が設定されていることから、生産者は大豆との輪作作物としてトウモロコシを生産している状況にある（2014 年時点）。

一方、大豆生産量は世界の生産量の約 2 割を占めており、大豆の国際市場に大きな影響力を有している。同年度の大豆輸出量は、世界貿易量の 1 割程度である一方、搾油後の大豆油かすの輸出量は世界最大である。トウモロコシと大豆は作付け時期が競合するため、それぞれの価格動向が作付面積に影響する。また、小麦は、大豆の裏作として生産される冬小麦が生産の大部分を占める。

① 主要な政策

アルゼンチンでは、穀物輸出に関し、主に輸出登録制度と輸出課徴金制度を設けている（2014 年時点）。

輸出登録制度は、国内への食料供給の安定と主要な食料品価格の上昇を抑制するため 1976 年に導入された制度で、輸出限度数量や輸出許可書の有効期間などが定められている。本制度は、かつてはトウモロコシと小麦の輸出限度数量が撤廃された時期もあったが、輸出が拡大する中で輸出許可数量が再設定され、その不透明さから生産者の増産意欲の妨げとなっている。

輸出課徴金制度は、2002 年 1 月の通貨切り下げに伴う大幅な税収減を補完するため、通貨切り下げで恩恵を受ける主要輸出農畜産物に対し設けられたものであり、2002 年 3 月より実施されている。

しかし、インフレの進行で食料品価格が上昇したため、農産品の国内供給の安定を目的として品目ごとに数次の税率変更が行われており、2014 年の税率はトウモロコシ 20%、大豆 35%となっている。

② 飼料穀物の需給動向

MINAGRI によると、2014/15 年度のトウモロコシ生産量は、3382 万トン（前年度比 2.2%増）となった。また、大豆については、6140 万トン（同 15.0%増）となった（表 4）。

USDA では、同年度のアルゼンチンの輸出量を、トウモロコシは 1845 万トン（同 43.6%増）、大豆は 774 万トン（同 34.8%増）としている。

表4 主要穀物生産量の推移

区分／年度		2010/11	2011/12	2012/13	2013/14	2014/15
トウモロコシ	作付面積(千ha)	4,561	5,000	6,133	6,099	6,034
	収穫面積(千ha)	3,748	3,696	4,864	4,837	4,627
	生産量(千t)	23,800	21,197	32,119	33,087	33,817
	単収(t/ha)	6.35	5.74	6.60	6.84	7.31
大豆	作付面積(千ha)	18,902	18,671	20,036	19,782	19,792
	収穫面積(千ha)	18,765	17,577	19,419	19,253	19,335
	生産量(千t)	48,889	40,100	49,306	53,398	61,398
	単収(t/ha)	2.61	2.28	2.54	2.77	3.18
小麦	作付面積(千ha)	4,582	4,631	3,162	3,648	5,261
	収穫面積(千ha)	4,532	4,496	3,019	3,452	4,957
	生産量(千t)	15,876	14,501	8,025	9,188	13,930
	単収(t/ha)	3.50	3.23	2.66	2.66	2.81
ソルガム	作付面積(千ha)	1,233	1,266	1,158	997	841
	収穫面積(千ha)	1,013	914	890	788	659
	生産量(千t)	4,458	4,252	3,636	3,466	3,098
	単収(t/ha)	4.40	4.65	4.09	4.40	4.70

資料：MINAGRI

③ 価格動向

2014年の穀物1トン当たり生産者販売価格は、インフレなどにより、トウモロコシが1156.6ペソ（前年比25.1%高）、大豆が2483.3ペソ（同35.1%高）、ソルガムが974.7ペソ（同15.8%高）となった（表5）。



写真1 トウモロコシの播種作業

表5 主要穀物の生産者販売価格

(単位：ペソ／トン)

区分	2010	2011	2012	2013	2014
トウモロコシ	551.5	703.4	715.0	924.5	1,156.6
大豆	1,028.4	1,306.2	1,652.4	1,838.4	2,483.3
ソルガム	423.4	695.0	693.3	842.0	974.7

資料：MINAGRI

注：生産量、輸出量、1人当たり消費量は、枝肉重量ベース。



写真2 薬剤がコーティングされ、食用と混ざらないように緑色に色付けされたトウモロコシの種子